

早春の追憶

松木 詠史



な自分たちの若き日を思い出しながら、彼を懐かしむ日が来るだろう。

役目を終えた頑固親父が、皐月台に腰を下ろしている。

久しぶりに恵那北の校舎の前に立った。春の気配を感じさせる柔らかな光を受けて、彼は皐月台にどっかりと腰を下ろしていた。まるで頑固親父が縁側でひなたぼっこをするように。

この皐月台で学んだ若者を、彼は、叱り、励まし、そして抱きしめて、送り出してきた。若者たちは、時に彼に怒りをぶつけ、反抗し、罵倒した。しかし、彼はいつも黙って若者を受け入れていた。きっといつか、若者たちも、そん



新たなエネルギーに取って代わられた、かつての繁栄の遺物の象徴だ。それでも恵那北の煙突は天を突き刺し、立っている。

以前、どこまでも天に向かって、聳える姿を頼もしく思ったものだ。不思議と惹かれたものだ。工場でもないのに、こんな立派な煙突のある学校は、そうそうあるものではない。皐月台の寒さは厳しい。そんな厳しい寒さから守ってくれた煙突は、今でも天を見上げて立っている。

かつて日本は石炭や石油によって繁栄を極めた。そうしたエネルギーが日本の活気を生み出していたのだ。だが、今となっては、煙突は、



今も、「私たちの学校宣言」が校舎の壁に掲げられている。学校宣言は私たちにとっての理想であった。目指すべき学校の姿であった。その理想を掲げた校舎で学ぶことは私たちに大きな意味を持っていた。だが、時間とともに理想はいつしか影が薄れ、その存在さえ忘れ去られたかに見えた。誰も訪れることのない校舎に掲げられた学校宣言はいかにも象徴的だ。

考えてみると、いつの時代も理想とはそういうものではないか、時の流れとともに薄れ、忘れ去られていく。しかし、その理想のもとで育った者は決してそれを忘れない。心のどこかに持ち続け、苦しくなったとき、つらくなつたときには、必ず励ましてくれる。かつて理想を掲げた経験こそが心の

よりどころとして、生涯の糧になるのだ。



校門に刻まれた「皐月台」の文字は、朝、僕らを迎え、夕暮れには見送ってくれた。ある時はうれしく笑みに満ちた顔を、ある時は暗く思い憂鬱を抱えた顔を、一日学んだ充実感や部活の心地よい疲労感の感じられる背中を、来る日も来る日も見守ってくれた。黙って、額に汗して働いてくれた父のように。



暑い夏は噴き出る汗と爽やかな風の相反する感覚を楽しみながら走ったこと。寒い冬、熱い豚汁をすすりながら、グラウンドに下りてボールを追ったこと。熱い感動を胸に抱いて、大声で応援歌を唱ったこと。そのすべてを青春の残像として、グラウンドの土は、微かな草の匂いとともに記憶していることだろう。



恵那北を訪れた。暖かな春の気配の感じられる日であった。ひっそりと静かであった。懐かしさがこみ上げる。玄関を開けて校舎に入ると、何となくよどんだ空気を感じる。人がいないということはいか。職員室のドアを開けてみると、流し台やロッカーがかつての学校であったことの名残として無造作に見捨てられていた。フロアに残された電話がむなしい。しかし、この電話はつながっていて、まるで唯一の生き物のように感じられた。

校舎内を歩くと、恵那北で過ごした四年間が脳裏に浮かぶ。やんちゃだった生徒たちの顔が懐かしく

思い出される。ここであいつが笑っていた、そこであの子が泣いていた…。

学校とは勉強し、部活をし、高校卒業という資格を手に入れるだけのところではない。母国、母語などのように「母」という言葉を冠するものの一つだ。人を生み、育み、慈しむところなのだ。

恵那北の教室に立ち、授業をしながらふと窓の外を眺める。その四季の風景が好きだった。目の前のグラウンドに汗を流す生徒たち。咲き誇る阜の花、流れる付知川の清流。山間の地に暮らす人々。恵那北は土地の人々と結び合う、地域に根ざした学校だった。そんな学校が役目を終え、今ひっそりと沈黙している。



Photo Eishi Matsuki